

第40回「東書教育賞」 贈呈に当たって

代表取締役社長 渡辺 能理夫



第40回「東書教育賞」の各賞を受賞された先生方、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

今回は第40回という記念すべき節目に当たりますが、この「東書教育賞」は、東京書籍の創業75周年を記念して1984（昭和59）年に創設され、翌年1月から公募が始まったものです。振り返りますと、この1984年という年は、中曽根内閣の下で臨時教育審議会（臨教審）が設置された年でありました。臨教審はその後数次にわたる答申を出しますが、「個性重視」「生涯学習」「国際化・情報化への対応」など、大きくは今日まで続くその後の教育改革につながる方向性がここから示された気がいたします。実は私も、当時新米編集者としてすでに教科書編集に携わっていましたが、教科書についても「教授材」から「学習材」への転換という方向が示され、そこから教科書づくりの在り方が変わったという実感をもっております。また、臨教審答申を受けて改訂された平成元年版学習指導要領（1989年）では、「新しい学力観」が示され、その流れが今日までの基調となっていると言ってよいのではないのでしょうか。

今、こうして振り返りますと、「東書教育賞」の40年が、臨教審以降40年の教育改革と重なっているのかと思え、感慨深いものがございます。過去40回の入賞論文のリストを見ますと、研究

テーマの重点が変遷してきたことがうかがわれ、教育改革が進む中で次々に浮上ってくる新しい課題に対し、その時々先生方が懸命に取り組んでこられたお姿が偲ばれます。当社は教科書発行者ですので、賞の創設当初は、教科教育に関わる授業実践研究を主に想定していたのではないかと思います。しかし、次第に「総合的な学習」や「学校経営」「ICT活用」あるいは「食育」など、教科の枠に収まらない応募論文が増えてきております。今回も小中学校の最優秀および優秀賞に輝いた5人の先生方のうち、実に4人の方が教科の枠には収まらない研究テーマでのご応募でした。それだけ、学校における教育課題が多岐にわたって広がっていることの一つの証左とは言えないでしょうか。そうした様々な課題に懸命に取り組まれ、そこで明らかになった成果や課題を論文という形におまとめになってこられた先生方に、心からの敬意を表します。

この「東書教育賞」が、そうした長年にわたる先生方の実践研究の営みの一端に寄り添えるものであったとしたら、望外の光栄に存じます。こうした敬意を込めて、今回は第40回記念として、これまで複数回応募・入選なさった先生方に「特別記念賞」を贈呈させていただくことにいたしました。

今回は、全国から154編のご応募をいただきました。ご多忙を極める学校にあって、この第40

回「東書教育賞」にご応募いただいた全国154組の先生方にお礼を申し上げます。そして、受賞された先生方に改めてお祝いを申し上げます。

最後になりましたが、ご多用の折に、最終審査をご担当いただきました審査委員の先生方、

一次審査をご担当いただきました東京教育研究所主任研究員の先生方をはじめ、ご協力をいただきました多くの先生方に厚くお礼を申し上げます。

皆さまの今後ますますのご活躍とご多幸を心よりお祈りいたします。